

主 題：嫌いな人に言いたいこと

聖書箇所：ルカの福音書 17章1-10節

箴言に「憎しみは争いをひき起こし、愛はすべてのそむきの罪をおおう」（10：12）とあり、ペテロも1ペテロ4：8で「何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。」と語っています。私たちが人を愛するとき、私たちが愛をもって互いに仕え合うときに、私たちは、私たちに犯される様々な罪を赦し、それを何ら問題としないで先に進んで行くことができます。それ故に「愛は罪をおおう」とソロモンもペテロも同じように私たちに教えるのです。しかしながら、残念なことに現実に私たちが経験することはそのようでないことが多いのです。思いがけないことば「あなたはなぜそのようなことができるのですか？」とか「あなたがそのようなことを言うなんて信じられない」と言われることがあります。私たちにはあらゆる人間関係をずっと良い状態に保ち続けることは困難であることを知っています。ときにそのようなことは不可能だと考えることすらあります。私たちが最も安心して居るそのときに、周りから、四方八方からこぶしが飛んできます。この人は大丈夫と思っていた人からいきなりひどいことば、行動を受けることもあります。そのようなとき、私たちはどのような対応をするのでしょうか？私たちの感情は相手を憎み、時には無視しようと思ったり、どのようにして報復しようかと考えたりします。けれども、私たちがはっきり言えることは、それはイエス・キリストが私たちに願っていることではないということです。

今朝、私たちは実践的なことを学んで行きたいと思います。私たちに対して人が悪をたくらみ、それを行なったとき、私たちが傷つけられ、罪を犯されたとき、私たちはどのように対応すべきか、その原則をこのルカ17：1-10に書かれているイエスのことばから見ることができます。ここでイエスは私たちに「私たち自身がつまずきを与える者にならないことを注意し」、そして「つまずきを犯した兄弟をどのように再び交わりへと回復させることができるのか」を教えています。ここでイエスが語ることは私たちが人間関係を良くして行くための秘訣です。対人関係がどのように主の前に喜ばれるものになるのか、そのことをイエスのことばを通して学んで行きましょう。

17:1 イエスは弟子たちにこう言われた。「つまずきが起こるのは避けられない。だが、つまずきを起こさせる者は、忌まわしいものです。」

:2 この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。

:3 気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。

:4 かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」

:5 使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」

:6 しかし主は言われた。「もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、この桑の木に、『根こそぎ海の中に植われ。』と言えば、言いつけどおりになるのです。」

:7 ところで、あなたがたのだれかに、耕作か羊飼いをするしもべがいるとして、そのしもべが野らから帰って来たとき、『さあ、さあ、ここに来て、食事をしなさい。』としもべに言うでしょうか。

:8 かえって、『私の食事の用意をし、帯を締めて私の食事が済むまで給仕しなさい。あとで、自分の食事をしなさい。』と言わないでしょうか。

:9 しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。

:10 あなたがたもそのとおりです。自分に言いつけられたことをみな、してしまつたら、『私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。』と言いなさい。」

☆私たちがもつ人間関係を良くして行くための秘訣（主に喜ばれる対人関係）

I. 私たちは人々につまずきを与えないように注意すること 1-2節

イエスはこの人生にはつまずきが起こることは必ずあると言います。私たちが罪を犯してしまうようになつまずきが目の前に置かれる時があるのです。1節「つまずきが起こるのは避けられない。」とあります。このことばを直訳すると「つまずきが来ないことは不可能だ」となります。イエスは私たちの人生の歩みにおいて、私たちが罪を犯してしまうような誘惑に置かれることは常にあるのだ、それを避けることはできないと教えるのです。これは私たちが何度も経験していることです。私たちは罪に支配された世界の中に生きて、罪をもった人々と関わっていますから、私たちの周りにはつまずきが満ちているといっても過言ではありません。イエスはその事実をひとことで教えるのです。私たちがこの地上において完全な人間関係をもつことは不可能だと知っています。この教会においてだれ一人として互いに罪を犯

し合うことなく生きることはできないことを私たちは知っています。なぜなら互いに罪をもっていることをよく知っているからです。それ故に、イエスはつまずきは起こると言われるのです。イエスはまずこの事実を教えるのです。

その中であって、私たちは何に注意しなければならないのでしょうか？イエスの次にことばを見ると、このようにつまずきが起こる世界にいなながらも、もし私たちがつまずきを起こす者になるなら、それはのろわれるべきものだと言います。「**つまずきを起こさせる者は、忌まわしいものです。：2 この小さい者たちのひとりに、つまずきを与えるようであったら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。**」と、具体的でよく分かる表現ですが、イエスが言わんとすることを良く理解するためには文脈を見なければなりません。これはどのような状況の中で語られたのでしょうか？17章は15章から始まっている一連のイベントの中に見ることばです。15章を見ると、取税人や罪人たちがイエスの話を聞きに来たことが記されています。信仰をもって来たのです。そこでイエスは様々な話をされるのですが、この時イエスの周りにいたのは彼らのほかに弟子たち、そして、パリサイ人や律法学者たちです。15、16章の流れを見て行くと、このパリサイ人や律法学者たちが、どのような思いでイエスのことばに耳を傾けていたのかを知る箇所が何度か出てきます。たとえば、16：14には「**さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。**」と記されています。彼らの態度が分かります。罪人たちがイエスの前に真摯な態度をもって教えを受け、天の御国に入ろうと心から願ってやって来たのです。その時に、ユダヤ人たちのリーダーであったパリサイ人たちのとった「私はキリストを受け入れたくない」という態度、そして、彼らのキリストへの批判的なことばや思い、そのようなことをイエスはよくご存じでした。彼らは罪人たちの行動を妨げたのです。イエスは彼らに対して何度ものろいの宣告をされています。特に、その中でも最もきびしくはげしいものは、マタイ23章に出てきます。23：13「**しかし、忌むべきものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、人々から天の御国をさえぎっているのです。自分もはいらず、はいろうとしている人々をもはいらせないのです。**」とあなたがたはつまずきだと言います。ルカの福音書17章では「つまずき」を起こさせるものがいったいどんなのかについて言及されていませんが、その状況から小さい者たちにつまずきを与えていたのは彼ら、律法学者やパリサイ人であると言っています。この「小さい者たち」とは霊的に幼いクリスチャン、新生したばかりの人々のことです。イエスはつまずきを与える者が何をすべきかを「**そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。**」、溺死しなさい、それほど大変なことだと言うのです。パウロはローマ12：18で「**あなたがたは、自分に關する限り、すべての人と平和を保ちなさい。**」と、自分の行ないに注意し人々との間に争いを起こさないように、人々の前につまずきを置かないようにしなければいけないと教えるのです。14：13を見ると「**ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。**」とあり、私たちは人につまずきとなるような行為をしないように心がけていなければなりません。決心し努力しなければならないのです。

II. つまずきに対してどのように対応するのか 3節

私たちが人々に対してつまずきを起こしているなら、すべきことははっきりしています。悔い改めて神に赦しを求め、その相手に赦しを求めることです。では、被害者、つまずきを受けたときどうすればいいのでしょうか？イエスはそのことを3節に三つの方法をもって具体的に教えています。

1) 気をつけていなさい

「あなたたち自身は気をつけていなさい」と直訳できます。これはつまずきを与えることがないようにあなたが注意しなさいと捉えることができますが、イエスがこの後に他の人との対応を求めておられることを考えると、「あなたたちがお互いの間で注意を払い合いなさい」と考えることがより良い理解です。自分の行動だけでなく他の人の行動にも気をつけて、互いに気を配り合いなさいというのです。私たちは神の家族だからです。私たちの愛する兄弟姉妹が神に忌み嫌われることをしないように願うからです。

2) 罪を犯す者のところに行く

私たちは自分自身が罪を犯す者であると同時に、罪を犯されることがあるのです。私たちが被害者になったとき、私たちがまず思うことは加害者が私のところに来なければならないということです。現実には私たちが何かの被害を受けたとき、ある人は自分の内側にこもってその悲劇を嘆き、ある人はやり場のない怒りを物や人にぶつけ、ある人はそれを他の人に告げることによってあわれみを受けることを喜びゴシップするのです。しかし、罪を受ける側になったとき、すべきことは本人のところに行って、その罪を告げることです。多くの場合、人間関係に問題が起こるのは加害者より被害者に問題があるのです。誤解によるからです。互いのことばがなくただ状況で判断してしまうときミスが起こります。その罪がどのようなものかを知っているのは加害者だから、あなたが行きなさいと言うのです。イエスは

言われます。「もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。」と。

3) 悔い改めれば赦すこと

私たちが出て行って人を責める時、戒めを与える時、残念ながら、多くの場合その行為は攻撃になっています。決して報復であってはなりません。私たちが出て行く目的は赦すことです。その人と和解し、その人が正しく歩み神との交わりを回復し、ともに主を崇めたいからです。マタイ18章では教会戒規が教えられています。「このように、この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません。:15 また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。:16 もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。:17 それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」、この目的は罪人を懲らしめるためではありません。その人が悔い改めて交わりが回復されることです。罰ではなく罪からの解放、赦しのためです。神は私たちがのろわれること、忌み嫌われることなど全く願っておられません。だから、赦すために責めなさいと教えるのです。私たちは神からキリストにあるすばらしい赦しを受けているから、その赦しを与えるようにと命じられています。私たちが私たちに罪を犯す者と和解をするというのはぜひするべき責任なのです。選択ではありません。出てゆく行動を起こすときにはもうその人を赦す心の思いが備えられているはずなのです。これが原則です。そして次に、これらのことができるためにしっかり理解するべきことを教えています。

☆赦しを与えるために知るべきこと 4-10節

1) 赦しには限度がない

4節に3節をさらに詳しく説明します。「かりに、あなたに対して一日に七度罪を犯しても、『悔い改めます。』と言って七度あなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」。赦しを求める人には、何度でも…ということです。ここでひとつのことを理解しなければなりません。それは「赦し」とはいったい何かということです。赦すことは忘れることではありません。私たちに求められている「赦し」とは神が私たちに赦してくださったその赦しです。マタイ18章の続きには王の前に赦された人のたとえ話がありますが、その通りです。神は忘れることはありません。そして、私たちは完全に忘れることなどできません。神は言われます、「わたしは思い出さない」と。過去に起こった罪をもう一度思い出さないこと、それが神が望まれることです。

2) 私たちが赦すと決めるから赦すことができる

「一日に」とあります。その日のうちに変わることはなかなかできません。悔い改めが明らかにうそであるという確証がないかぎり赦しを与える決意をするのです。それが何度であったとしても…。私たちは人々を信頼することが求められています。Iコリント13:7には「**すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。**」とありますから、兄弟が「悔い改めます」と言うかぎり、そのことばを信じて赦しを与えなければいけないのです。それは「私は赦したい」という決意に基づいているのです。

3) 私たちは赦すための信仰をもっている

5節「**使徒たちは主に言った。「私たちの信仰を増してください。」**。7度も赦すことは難しいこと、霊的に未熟だからできない、だからもっと信仰を増してくださいと、私たちもよく口にするのですが、イエスの答えは6節「**もしあなたがたに、からし種ほどの信仰があったなら、**」です。信仰が多くあるから赦せるのではないと言われます。もしあなたに本物の信仰があるなら、それがどのように小さなものであってもそれを正しく働かせるなら、偉大な働きをすることができるのだと。赦しは信仰に基づいているのです。

4) 赦すという行為は私たちがなすべき責任である

赦すことは当然することだとイエスは言われます。7-10節にイエスは一つのたとえ話を話されます。しもべが主人に仕えることは彼の務め、責任であることを話し、最後に『**私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。**』と言われます。これが私たちに求められていることです。神は言われます。赦すことは選択ではないと。たとえ私の感情が赦したくないとしても、私の責任は赦すことだと教えるのです。それは私が神から赦されたからです。

今日のタイトル「嫌いな人」とは、私に罪を犯す人のことです。その人に言うべきことは「私はあなたを赦したい」です。神が私を赦してくださったから、私はあなたを赦したい、どうぞその罪を悔い改めてください、あなたが悔い改めるまでその罪を思い起こし責め続けます。なぜなら、あなたが神に忌み嫌われるものになってほしくないから。そして、悔い改めが起こるとき、もうそれを思い出さないと赦すことができるのです。そのような関係があるなら、たとえつまずきが起こったとしても正しく解決できるはずです。